

人口分布の経年変化と高齢化

～東から西へ、
浸水危険地域へ広がる
住民の生活圏～
人口規模と避難施設の
適正規模を問う

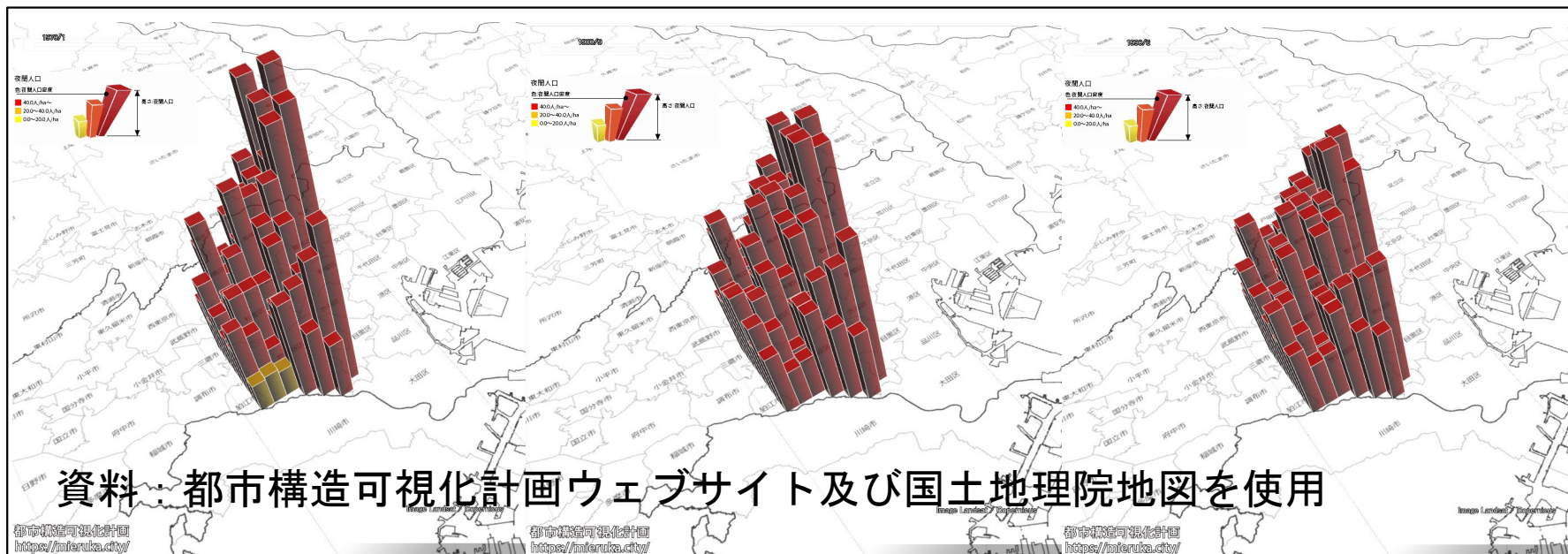
多摩川沿いのスーパー堤防上部に広がる
二子玉川公園から望む富士山



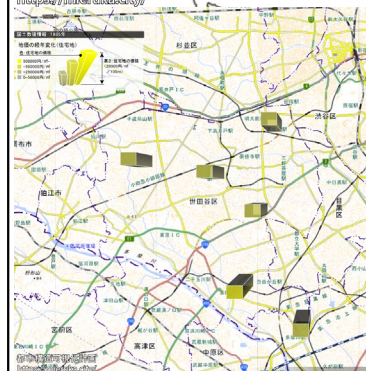
所属名 東京都世田谷区

1.人口分布比較と1995年地価状況

1970年（左）と1980年（中）と1990年（右）の人口分布の変化を比較
（都心（東）側から徐々に西側へと広がる）



1995年住宅地の
地価状況は左図
のとおり需要が
高いのは東側で
ある

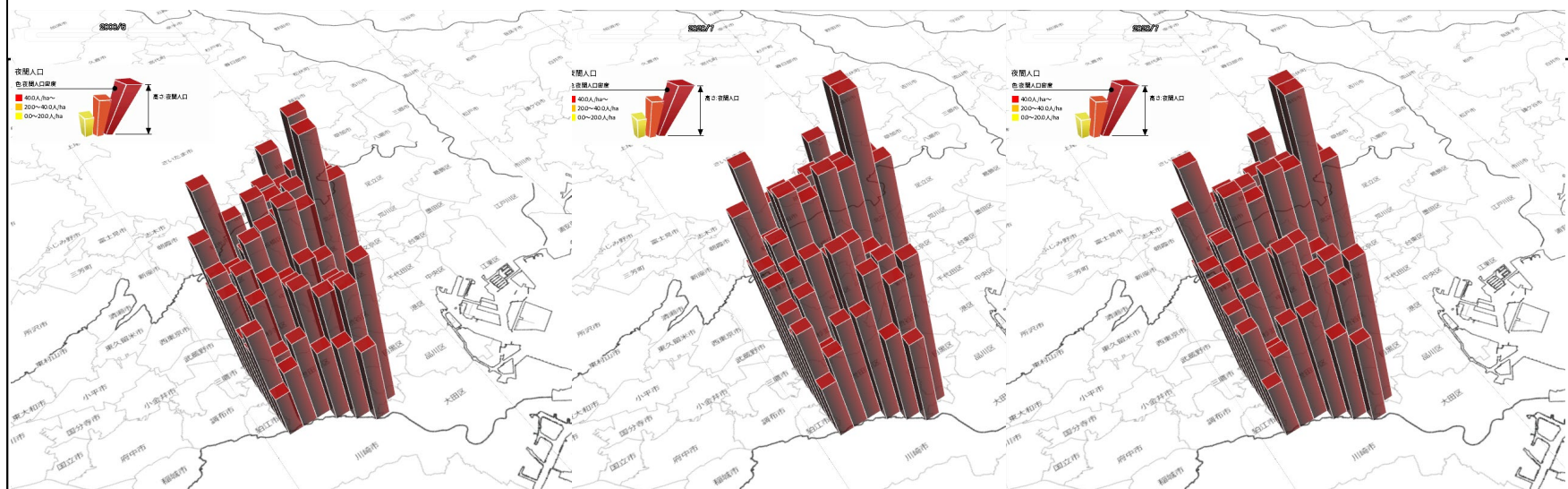


1995年商業地の地価状況
も区の東側に偏っている
ことがわかる。
居住区域の広がりとともに
地価の上昇がみられる

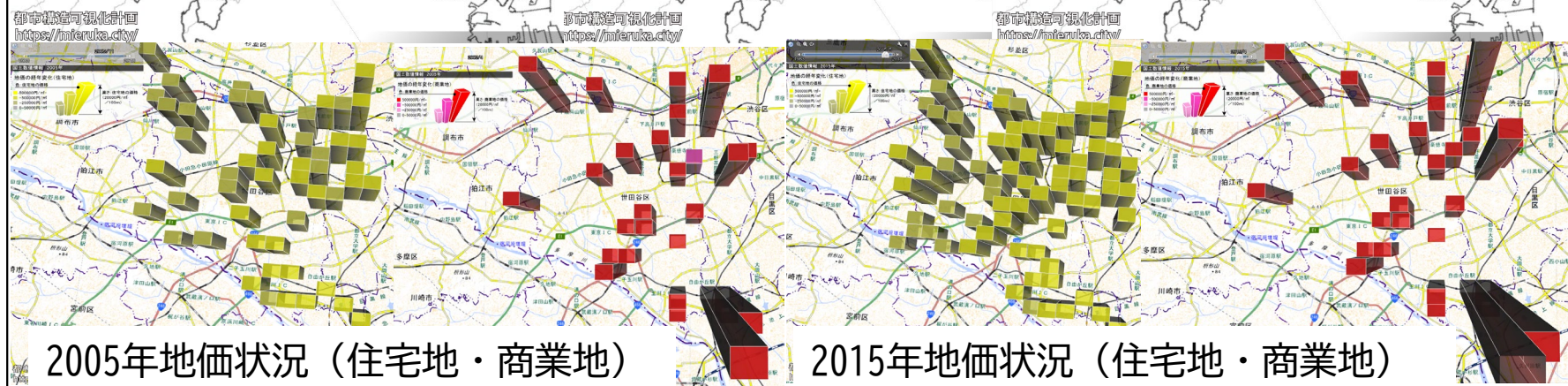


2.人口分布比較と地価状況

2000年（左）と2010年（中）と2020年（右）



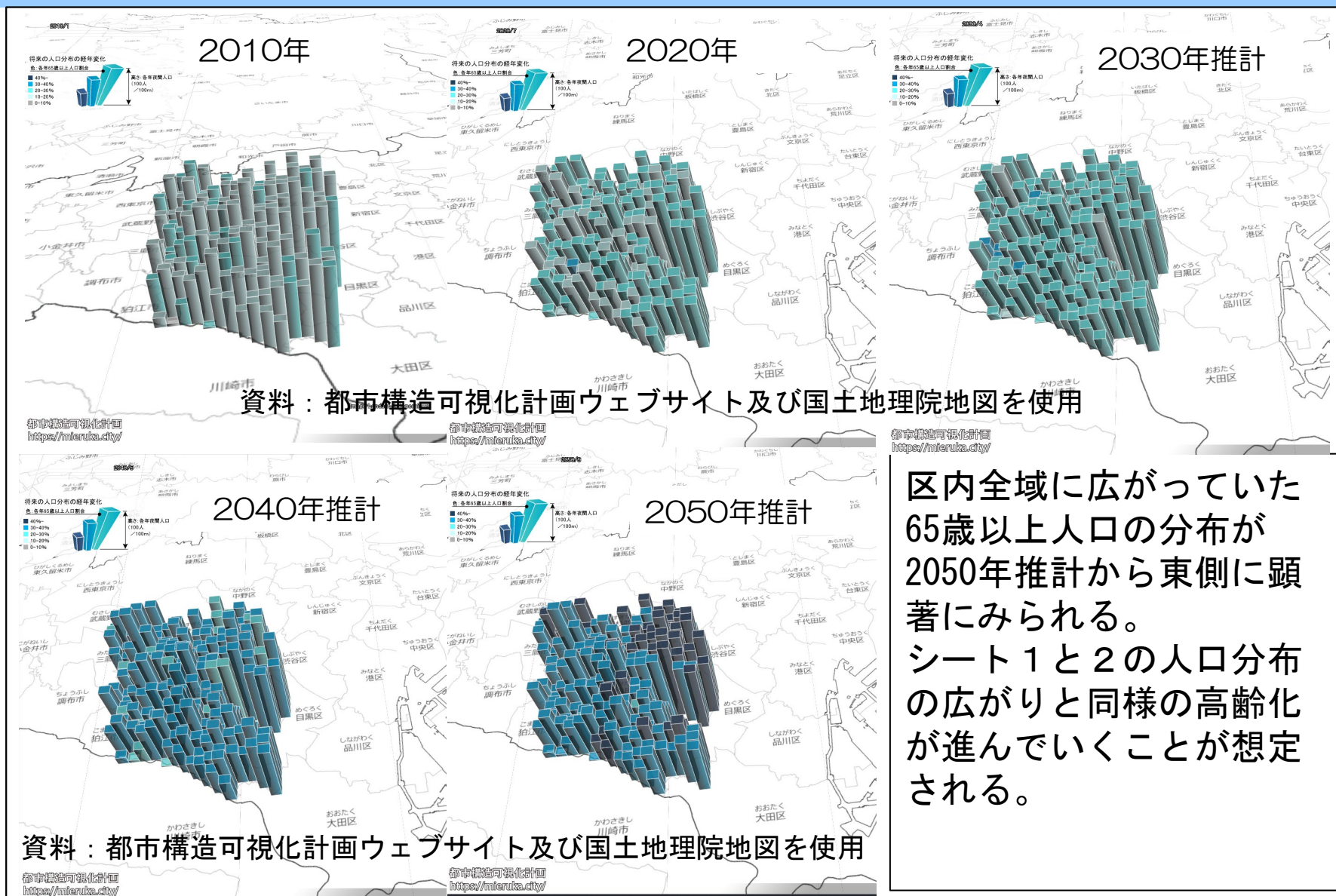
資料：都市構造可視化計画ウェブサイト及び国土地理院地図を使用



2005年地価状況（住宅地・商業地）

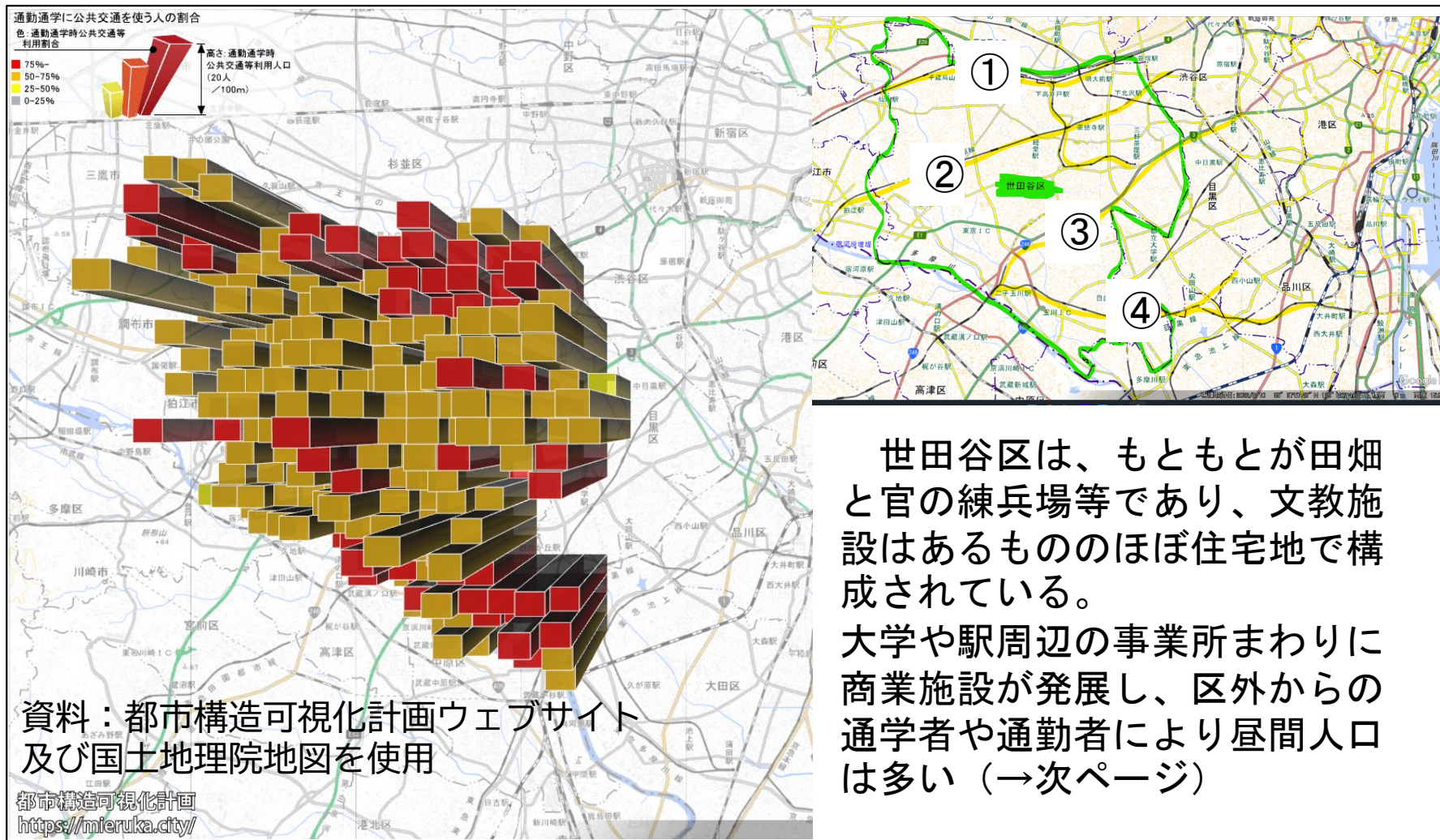
2015年地価状況（住宅地・商業地）

3.65歳以上人口分布将来推計



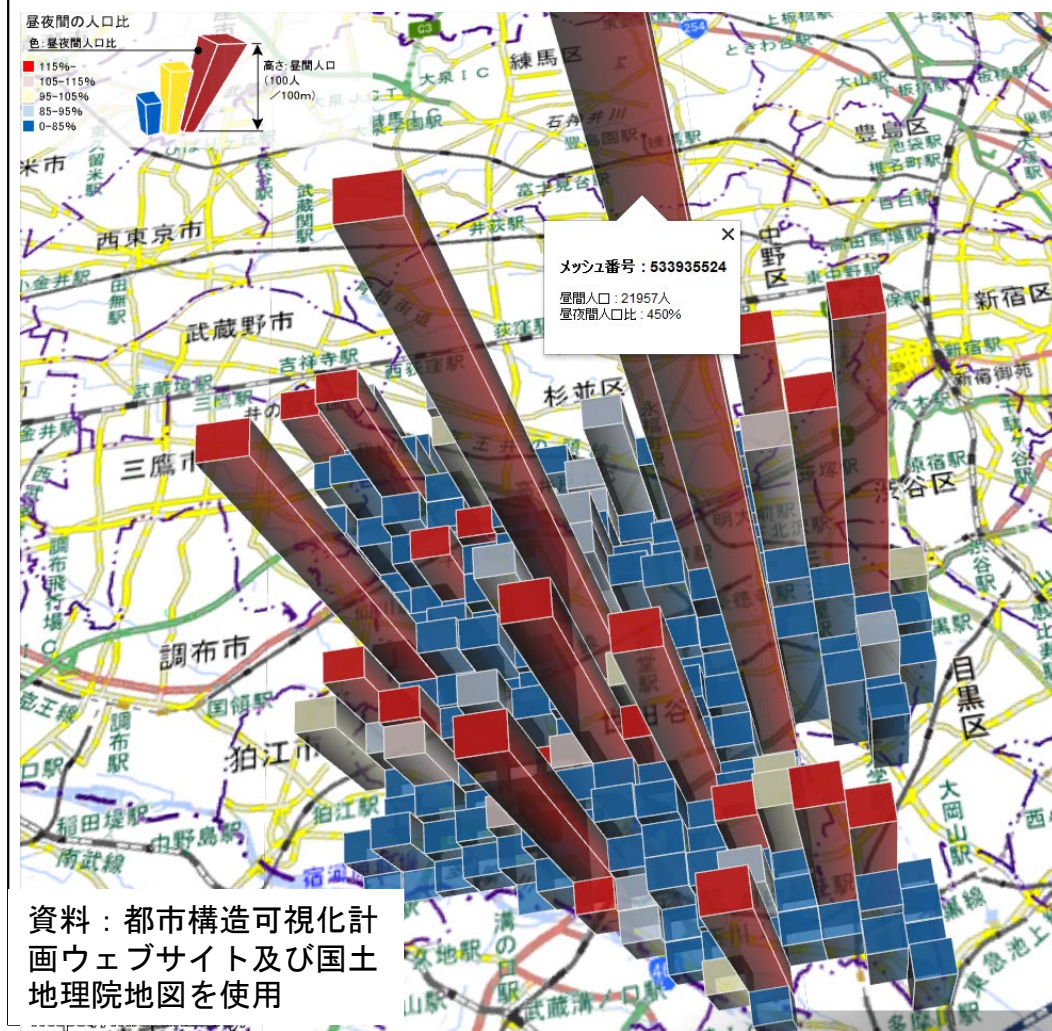
4.公共交通利用の通勤通学者割合

東西に抜ける鉄道路線①～④に沿った通勤通学者の分布がわかる



5. 昼夜間の人口比からみる分布

赤く突出している昼間人口過多の箇所は大学等文教施設がある



通ってくる通学者、通勤者が多く昼夜間人口比が400パーセント越えをする箇所があるほかは、区外へと昼間は通勤・通学しているので、昼夜間の人口比は50パーセント前後。都心のオフィス等に通う住民が多いことがわかる。

ほぼ住宅に占められた街、道路も狭く空地もない。昼間は学校施設には学びに来ている児童生徒であふれ、夜間は人がいないといっても収容可能人員には限界がある。

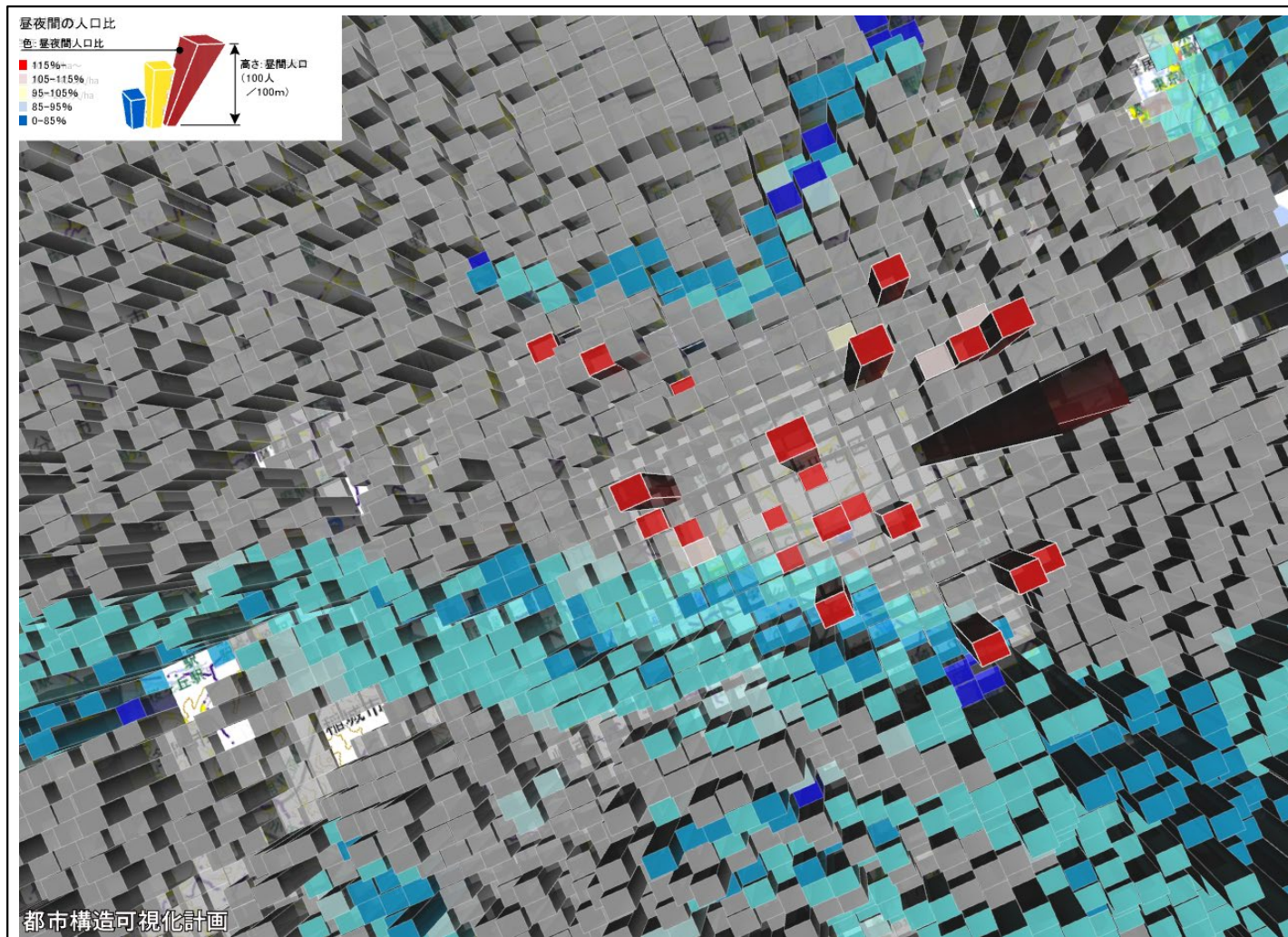
区内の公立小・中学校と私立学校、高校、大学施設等の災害時の避難場所を考えたときに果たして避難所として機能し得るのか検証が必要だろう。

世田谷区総人口は約92万人。学校施設90校で1000人の避難者を受け入れたとしても10分の1。

避難施設や災害廃棄物の置き場所、果たして機能し得るのだろうか。

6.洪水浸水域と夜間人口、昼間人口（赤）

浸水域内の昼間人口の多い箇所、浸水域の人口増がみえる



これまでのシートから南部の多摩川ぞいの宅地開発がすすみ住民が増えている。洪水浸水域への居住者および通勤通学者への対処が問われる。

資料：都市構造可視化計画ウェブサイト及び国土地理院地図を使用

東京都世田谷区

都市の紹介

面積：58.05km²

23区の中では西南端に位置する。

現在、区役所本庁舎を居ながら改築改修中。

本庁舎内にいた都市整備領域の所属は多摩川沿いにあるもと都立高校建物を仮庁舎として機能移転して運営中。

令和8年移転予定である。



東は渋谷区・目黒区、南は大田区、北は杉並区・三鷹市、西は狛江市・調布市と接し、多摩川をはさんで神奈川県川崎市と向かい合っている。

人口92万人ほどにもなり、特別区としては大田区、練馬区と並び人口規模が大きい。東西に抜ける鉄道は走っているが南北の交通は不便な街である。

区の鳥：おなが 区の花：鷺草 区の木：けやき



区政概要より